

アルタイ諸語、朝鮮語と日本語における視

覚動詞の試行相文法化用法の展開*

山崎 雅人

大阪市立大学大学院文学研究科

1. はじめに

「みる」を本来の視覚活動から試行を表す「～みる」の意味に転じる文法化現象は、日本語と朝鮮語のほかアルタイ諸語にも広く見られる。本研究は、この文法化用法の特徴を三つの現象「漂白化(bleaching)」「保持化(persistence)」「主観化(subjectification)」の段階的差異と地理的分布に関連づけて考察する。すなわち、現代ウイグル語 *baqmaq/körmek* やウズベク語 *boqmoq/ko'rmoq* などのチュルク諸語、モンゴル語 *γзэх*、満洲語文語 *tuwambi*、朝鮮語보다、日本語「ミル」には、試行相助動詞化と結果含意・因果関係強調をもたらす漂白化と保持化は見られるが、推量の意味まで持つのは日本語と朝鮮語だけで、さらに意思と丁寧さを表せるのは朝鮮語のみであり、北東・中央・西アジアのアルタイ諸語にはこれらの用法がないため、視覚動詞の試行相文法化用法における主観化は、東アジアの二言語の特徴と見なすことができる。

まとめると、以下のようになる。

- ① 試行相助動詞>
- ②結果含意・因果関係強調>
- ③推量・意思の表現>
- ④丁寧な対人表現

	①	②	③	④
アルタイ諸語	○	○	×	×
日本語	○	○	△	×
朝鮮語	○	○	○	○
	漂白化	保持化	主観化	間主観化

また、試行相に用いられる視覚動詞は、現代ウイグル語とウズベク語では正と負の意図性の動詞ふたつでカザフ語やキルギス語は負の意図性動詞であるのに対し、満蒙両語 *γзэх/xapax*, *tuwambi/sabumbi*、と日朝両語「見る」/「見える」、보다/보이다では、い

ずれも正の意図性動詞であるという特徴を有し、中央・西アジアのチュルク語族とは異なっている。

2. 文法化のモデル

最初の段階である、視覚動詞の試行相への文法化では、Heine (2003: 591-592)の“the bleaching model” $ab > b$ において、視覚活動を a とし、「面倒をみる」「切れ味をみる」のように事態認識を b とすると、漂白化により意味を縮小するうえで視覚活動の意味を失い、「聞いてみる」「目蓋を閉じてみる」のように、ある行為を行いその結果を考察・評価する意味から試行を表すと考える。

「みる」の本義は、言うまでもなく視覚活動を通して外部の情報を受容することである。次いで、見たものについて理解・判断をする意味を表す。

さらに、視覚活動の意味が薄れ、理解・判断の認知活動のほうに重点が置かれる表現は、「視覚に基づき対象を理解・判断して適切な処置を取る」ことを意味する。

すなわち、「視覚以外の知覚による認知に基づき対象を理解・判断する」とこと、「ある状況を経験する／ある状況が出現する」とことであり、ともに「見る」の本義である視覚活動からはすでに乖離している。ここでは、視覚動詞が情報の受容一般に拡大され、受容自体も経験者(experiencer)だけでなく、一般化されることで、客観的にある状況が出来ることを意味している。漂白化の主体である抽象化が進行したことを含意していると考えられる。

こうした漂白化のプロセスを一般化すれば、動詞の本義の中で抽象化が生じるところに、付随する周辺との関係が関わっている。これを視覚動詞の試行相化に適用すれば、視覚情報の受容に基づく判断や理解という認知活動への意味的連関が認められ、次いである動作をすることに伴い、その結果を判断することが試行の意味を伝えることになると考えられる。

つまり、「みる」の視覚情報受容という中核的意味がなくなり、視覚以外の知覚情報を受け入れて判断を行う意味に拡張する。したがって、 $ab > b$ において a と b は外界事象の認識という点で共通するが、前者が目で見える視覚感知であるのに対し、後者は意図した動作の評価を行う認知行為へと意味展開が背景にあると考える。そこでは、ある行為の結果を認めることに言及することから、その行為を行うこと自体の意義を認識することになり、試行的意味に展開

すると考える。

次の段階 $ab > bc$ は、“the loss-and-gain model”と呼ばれ、試行相 b に結果的なアスペクトの含意や因果関係の強調などの論理関係 c が付加される段階で、 b が残ることに着目すると、これを保持化の例とみることができる。

例えば“be going to”が空間移動から未来動作を表わすようになる過程で変化という要素を b とすると、それは漂白化により空間移動 a が失われたのちも保持される。Hopper and Traugott(2003: 97)は、“will”と“be going to”の意味的差異も保持化の事例とする。すなわち、“will”と“be going to”には意味上の棲み分けに見られ、前者は名詞としての意味から主語に立つ者の意志としての未来を表す点で後者とは異なっている。本来の意味が残存する点が保持化の本質とみなせる。同様に、視覚動詞を試行相に用いる文法化から結果含意と因果関係強調の表現へは、動作の結果を評価する意味が保持されると考える。

視覚動詞の試行相文法化成分が文中で前後両件を結ぶ機能を果たす場合を、松木(1997)はその文法化の度合いにより二段階に分けている。

文法化の低い段階が結果含意で、話者の注意は後件で述べる事情の方により強い意図があると思われる。すなわち、意外性のある結果など、通常思い至る事柄ではないことが実際に起きた場合、この文法化成分を使用する。

もうひとつが因果関係の強調で、文法化の度合いがより高く、前後件を論理関係で結び原因としての話し手の注意は前件に置かれる。

先に見たように、試行相助動詞はある動作をしてその結果を判断するという一連の行為として捉えられるのに対し、文中で前後件をつなぐ場合も、前件の行為を意図的に行うことで意外性などの情報価値があることが生じるとの含意を持つと考える。試行的意味は、前後件の論理的接続が仮定・理由と帰結になるものとは、ある動作を行いその意義を考察する（試行の結果を判断する）点で重なるため、意味的親和性が認められる。

保持化と前項の漂白化は一見逆方向の作用である。すなわち、前者は意味を保とうとし、後者はそれを喪失させようとする方向に働くからである。しかし、この両者が視覚動詞の試行相文法化というひとつの現象の中にも認められるからには、ある面での棲み分けがあるはずである。

「～てみる」は文末では意志性動詞のみに用いるもので、非意志性動詞とは不整合性を見せるが、文中ではこの意志性制約は中和することを意味する。文末では、試行相助動詞の意志性の制約は保持されるが、文中では論理関係が試行相より勝って意志性に関する制約は失われる、つまり、ここでは漂白化が保持化より優越すると考える。

日本語「てみると」「てみれば」「てみたら」などでは、後件情報が意外性のある結果の含意から、後件が論理的に期待される情報である因果関係の強調へと文法化の度合いが進むが、その場合の保持化により残存する試行的意味と論理関係との整合性が、ここで扱う全ての言語にも認められる。

最後の段階 $ab > bc > cd$ は“the implication model”と呼ばれ、特定の表現に話し手の意識表出を組み込む主観化により、論理関係 c に話し手の推量や意思、さらに聞き手との対人関係を反映する部分 d が加わるもので、論理関係 c の前件が話し手以外のことなら後件は推量に、前件が話し手自身のことなら後件は意思となる。

杉浦(2012)によれば、推量の「みたいだ」は文法化以前の「みたようだ」からの近世以降の展開で、比況、例示と推量の三用法があるとする。比況と例示だけでなく、推量もある事象と別の事象の間に類似性があることに基づくが、その類似性を認識する点で「見る」の認知活動における多義性に由来する文法化と見なすことができる。ただし、試行相の「てみる」から直接「みたい」になるわけではない。試行相助動詞が動詞連用形＋「テ」につくのに対し、この用法は名詞にはそのまま、動詞では終止形に接続するので、構造的にも別と考える。

日本語史において、試行相文法化は『土佐日記』にも例が見られることから、通時的に先行することは明らかである。

以下の例文中で、現代ウイグル語、モンゴル語と朝鮮語は、母語話者の確認を得た。

3. 各語の例文

① 試行相助動詞

○チュルク語族：

現代ウイグル語

(1) *Bir qétim yep baqmaq/körmek.*

一度 食べて みる

ウズベク語

(2) *Qo'ng'iroq qilib boqaman.*

電話 して みます

(3) *Qani bir tatib ko'ring!*

行って 味わって みなさい

サハ語

(4) *сурууйан көр*

書いて みる

カザフ語

(5) *miniп көрү*

乗って みる

キルギス語

(6) *Жапончо сүйлөп көрчү.*

日本語を 話して みなさい

トルクメン語

(7) *sōrap gör-*

たずねて みる

○モンゴル語族：

モンゴル語

(8) *Нэг удаа ч болов идээд үзэе.*

一度 食べて みる

ブリヤート語

(9) *амталжа үзэхэ*

味わって みる

オルドス語

(10) *vū völäpöbzi wži-*

銃を 的に 撃って みる

カルムイク語

(11) *ken tšidltē sördž üzj*

誰が 強い か 調べて みよう

○満洲・ツングース語族：

満洲語文語

(12) *si emu hüntahan omime tuwa.*

あなた一 杯 飲んで みなさい

エウエンキ語

(13) *əfi əmuŋ jirittə ulihənəm ifihə.*

今もう一度 電話を 掛けて みて

○朝鮮語：

(14) *한 번 먹고 보다.*

一度 食べて みる

(15) *비행기는 작년에 처음 타 봤어요.*

飛行機に 昨年 初めて 乗って みました

② 結果含意・因果関係強調

◎ 結果含意 (意外性のある後件)

現代ウイグル語：

(16) *Qaraship körgendin kéyin yaxshi adem iken.*

会って みた 後は よい 人 だった

モンゴル語：

(17) *Тэр нь ам нь муу боловч явулцаж үзвэл*

彼は 口が 悪いが 付き合っ て みると

овоо сайн хүн магадгүй.

けっこう 良い 人 かもしれない

満洲語文語：

(18) *amtalame tuwaci getuken genggiyen bime*

味わって みると すっきり 爽やかで ありながら

amtan tumin

味は 濃厚で

朝鮮語：

(19) *알고 보니(보면) 좋은 사람인데.*

分かっ て みれば 良い 人 なんだが

◎ 因果関係強調 (論理的に期待される後件)

現代ウイグル語：

(20) *Yapongha berip körup yaxshi dölet*

日本へ 行って みて よい 国

ikanlikini bildim.

だと 分かっ た

モンゴル語：

(21) *Очиж үзээд сайн мэдэжээ.*

行って みて よく 分かっ た

朝鮮語：

(22) *가 봐야 알지.*

行って みて 分かる だろう

(23) *바쁘다 보니 문안도 못 갔다.*

忙しかっ たので 見舞いにも 行けなっ た

③ 推量・意思の表現

(24) 比べて みると こちらの 方が もっと 良い みたい。

朝鮮語：

(25) 누가 왔나 보다.

((他者の 足音 などから) 誰かが 来た ようだ

- (26) 차라리 죽을까 보다.
(（自らに絶望して）いっそ 死んで しまおうか)

推量は話し手以外が意図する行為のことを話し手が判断することであるのに対し、意思は話し手自身のことを判断によるものであり、特に合理的な根拠によらず直感的に述べることから、この形式は漠然とした意思となる。

④丁寧な対人表現：

朝鮮語では、“가볼게”、“가보겠습니다”と言ってその場を退出することがある。これは聞き手と話し手との関係を反映する“보다”で、日本語の「行きます」より丁寧で、目上に対する辞去の挨拶である「失礼します」「失礼いたします」に相当する。語用論的な意味拡張として、話し手の主観的な対人的態度の表現になっている点で、主観化がさらに進んだ、話し手から聞き手への主観的作用である間主観性(intersubjectification)の具現化とみられる。

4. おわりに

これらは、秋元(2014: 5)が‘see’などの一般的な意味の語彙項目だけが漂白化を受けるとする実例と見られる。本研究では、こうした視覚動詞の試行相文法化用法の展開を通して、北東・東・中央・西アジアで隣接する諸言語に共通する認知様態の特徴と各語独自のあり方について、地理的分布を考慮しつつ明らかにできると考える。

視覚動詞の試行相文法化用法を持つ言語は、他にアイヌ語、漢語、ビルマ語、タイ語、ラーオ語、ベトナム語などアジア各地に分布している。これらの間でも、同様の機能展開が見られるかを今後研究して行きたい。

文献

- 秋元実治(2014)『増補 文法化とイデオム化』ひつじ書房
ドラル・オソル・朝克・中嶋幹起(2005)『エウエンキ語への招待』大学書林
Heine, B. (2003) “Grammaticalization”, In Joseph, B. and R. Janda, eds. *The Handbook of Historical Linguistics*, Oxford, Blackwell, 575-601.
Heine, B. et al. (1991) *Grammaticalization: a conceptual framework*, Chicago, University of Chicago

Press.

- Hopper, P. J. and Traugott, E. (2003) *Grammaticalization: second edition*, Cambridge, Cambridge University Press.

菊田千春(2011)「複合動詞テミルの非意志的用法の成立—語用論的強化の観点から—」『日本語文法』11-2, 43-59

松木正恵(1997)「「見る」の文法化—「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として—」『早稲田日本語研究』5, 1-12.

森英樹(2014)「「Vてみる」条件命令文のモダリティと再分析構造」『言語研究』145, 1-26.

Narrog, H. (2012) *Modality, Subjectivity, and Semantic Change*, Oxford, Oxford University Press.

Ono, Kiyoharu (2000) “Grammaticalization of Japanese Verbals” *Australian Journal of Linguistics*, 20-1, 39-79

Seongha, Rhee (2001) “Grammaticalization of Verbs of Cognition and Perception”, *Studies in Modern Grammar* 24, 111-135.

嶋田紀之(2009)「「Vてみる」の多義性と文法化」『日本認知言語学会論文集』9, 132-142

杉浦滋子(2012)「「～みたいだ」文法化の過程」『言語と文明』10, 33-53.

須永哲矢(2007)「「してみる」の意味」『日本語学研究』3, 38-51

田中聡子(1996)「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, 120-142

Traugott, E. (1995) “Subjectification in grammaticalisation”, In Stein, D. and S. Wright, eds. *Subjectivity and subjectivisation: Linguistic perspectives*, Cambridge, Cambridge University Press, 31-54.

Traugott, E. (2011) 福元広二(訳)「文法化と(間)主観化」『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』(高田博行他(編著)), 大修館書店、59-70.

山崎雅人(2016)「朝鮮語と日本語における視覚動詞の試行相文法化用法の展開」『日本認知言語学会論文集』16, 241-252

吉川武時(1975)「「～てみる」の意味とそれの実現する条件」『日本語学校論集』2, 36-51

*本研究は、JSPS 科研費 JP16K02634 の助成を受けたものです。